

ヒマラヤ

No.369



2002 AUGUST



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2003年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2003年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しない。

チベット カンペンチン(7,281m)

シジャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2003年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

アピ前衛峰から続く稜線に向け急雪壁にロープを伸ばした。稜線の先には女性の乳房を思わせる双耳峰のアピを望む事が出来た。ルート上からはカイラス、ナムナニ、マナサロワール湖といったチベットの風景、そしてパンチ・チュリ、ナンダ・デヴィといったインド、ガルワールの山々も望める、なんとも贅沢な至高の場所である。

(写真と文：野沢井 歩)

ヒマラヤ No.369

- | | |
|--|-------|
| 1. 日本ヒマラヤ協会創立35周年記念行事案内 | |
| 2. 新連載 ロー・マンタンの空、遥かなり(3) | 高橋 照 |
| 7. ヒマラヤ登山、日本隊50年の記録(2) | 山森 欣一 |
| 13. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books・ヒマラヤから〉 | |
| 15. ネパール登山規則大幅に改定される | |
| 17. インド治安情勢(インド、パキスタン間の緊張) | |
| 20. ニンチン・カンサ(7,206m)登山計画 | |
| 24. 寸感・事務局日誌 | |

日本ヒマラヤ協会創立35周年記念行事案内

2002年9月28日（土）

H A J は、1967年10月に創立され、諸先輩達の努力により本年、35周年を迎えることになりました。これを機会に幾つかの行事を行うことになりましたので、会員各位の積極的な参加を期待致します。

記

I. 講演の部

1) 場所：かんぽヘルスプラザ東京

2) 日程：

16:00 開場

16:05 主催者挨拶（会長 酒井國光）

16:10

記念講演：H A J の未知と未踏の足跡
〔尾形好雄〕 H A J の常務理事として、
本会の歴史全てを知る氏が、インド、中
国、ネパール、ブータンなど未知と未踏
を求めて活動したH A J 隊の登山をスラ
イドを使用してエピソードを混えながら
その足跡を語ります。

17:30 終了

3) 会費：無料（但し先着120名・会員外も可）

4) 申し込み：電話、F A X、ハガキなどで住所、
氏名、年令、性別を明記してH A J 事務局へ。

II. 祝賀会

1) 場所：かんぽヘルスプラザ東京

2) 日程：18時〔開宴〕

主催者挨拶、内外関係者祝辞

20時〔閉会〕

3) 会費：13,000円〔会費の中には「日本ヒマ
ラヤ協会創立35周年記念誌（約250頁）代」
が含まれております。記念誌は当日お
渡し致します〕

4) 申し込み：住所、氏名を記入の上「祝賀会」
と明記して郵便振替 00100-6-48954
「日本ヒマラヤ協会」宛、会費を納入
して下さい。〆切9月10日まで。

2002年国際山岳年記念事業

H A J 創立35周年記念ネパールヒマラヤ・トレッキング

35年前、あの素晴らしい「神々の座」を一人でも多くの人に見せて上げたい、観て貰いたい、との想いでH A J が創立されました。35年の星霜を重ねる中で、H A J に関わった仲間たちも3000名近くとなりました。時代が変わり、人が替われども荘厳な「神々の座」は太古のままです。35周年の節目を迎え、H A J のカメラードと今一度あのヒマラヤへ還り、新たな活力を享受してみませんか。

70年代には考えられなかった“ジョムソン・マウンテン・リゾート”に滞在して、ダウラギリ、アンナプルナ、ニルギリ、ダモダール・ヒマラヤなどの山々を存分に堪能してみませんか！H A J からネパールに精通している野沢井歩専務理事が同行します。奮ってご参加下さい。

ジョムソン、ムクチナート・トレッキング

期日：2002年10月13日（日）～23日（水）（11日間）

料金：368,000

〆切：定員になり次第

定員：30人

資料請求：H A J 事務局

ロー・マントンの空、遥かなり(3)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

高橋 照

ブリクティ登山に至るいきさつなど

昼食を食べながら、煙の立ちこめたバッチィの中を見渡すと、お内議の座っている奥の方に数名のネパーネ帽をかぶった若者が小鳥が止まり木に並んでいるように座って、だまって私達を眺めていた。この辺に住む人間だからおそらくボテ・グルンかタカリの青年達だろう。昔カトマンドゥの若者のようなハデな姿で、今流行の柄物のシャツを着込んでいた。ここでもカトマンドゥの若者のように、これはという仕事がないので、一日中こんな所にとぐろを巻いているのであろう。

ボテでないことは、顔や形ですぐ判断出来た。お内議もボテの服を着てはいたが、ボテ・グルンかタカリのようだった。おもしろいことに、彼女が薪をくべているストーブは、ボテのかまどとは全く違い、タカリの土で造ったかまどとも違う。昔、日本にあったブリキ製のルンペン・ストーブと全く同じものなので興味を引いた。もっとも、このルンペン・ストーブは真冬にタック・コーラに旅をした時、トゥクチェヤマルファで見たことがある。この辺は比較的薪が手に入り、しかも沢山の客をさばくので暖房用を兼ねて備えつけられているのであろう。

タシが私に

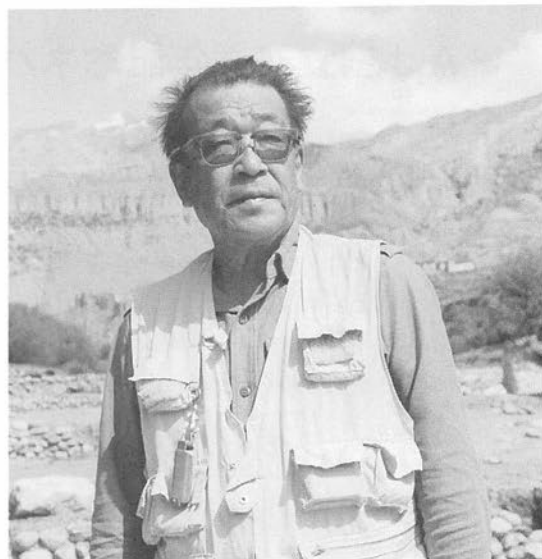
「さっきリエゾンがここを通過して行って、本日のキャンプ地はこの先の河を20分程登った河原の中に決定するといって、バッチィには寄らずに行ってしまったよ」というので、私は、

「このバッチィの裏にある中庭のような広場の方がいいんだがなあ。水もきれいなのが流れている筈だ。」というので、ケサン氏は、

「どうもわれわれが村の中に入っていることが気に入らないようですよ。いう通りにした方がいいでしょう。」という。キショールは何もいわずに

黙っていたが、彼はリエゾンに対しては極めて批判的であった。それは後になって判ったことだが、彼はライジング・ネパールの新聞記者なので、遠征終了後彼の新聞に載せた連載記事の紀行文の中で手ひどくリエゾンを“Big Hakim”（ネパール語ではバーラ・ハーキムといって「偉大なる役人」という意味だが、いうなれば「おエラさん」という表現を使っている）といって痛烈にたたいている。

私はまだ本隊が着くまでには時間が充分にあるし、それよりリエゾンのビーム・バードルが先に行っていることが判ったので、チュクサン村のあちらこちらと写真を撮りに廻った。そして、このバッチィでかれこれ2、3時間も休み本日の露营地ツォーナムに向かった。カリガンダキにそそぎ込むナルシン・コーラの河原を浅瀬をさがしながら進んだ。谷川の水は雪融けで赤褐色に濁った泥水である。これが今夜の飲料水かと思うとゾッ

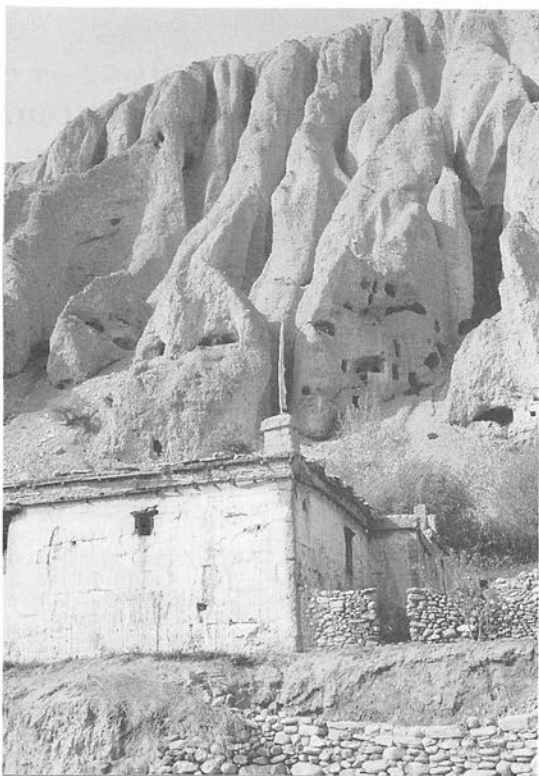


▲ツォーナムにて筆者

とした。5年前の雨期にこの河を渡った時は、水量ももっと沢山あったが透き通ったきれいな水だったことを憶えている。

ズングリ、ムックリした形のドロ柳の木が河原に点在するころ、そこはツォーナムの泊場であった。リエゾンのリュック・サックが木の下の方の上に置いてあったが姿は見えなかった。多分パッティに入っているのだろう。露営地の低い河岸段丘上に3棟の家が建っていた。金子さんはスネルグローブの本にある写真と全く同じですよ、という。家の裏手には砂岩に掘られたいくつかの洞穴があり、トッチー教授も穴居民族の住んだ洞穴跡だと指摘している。今はこの家はパッティもやっているらしく物置にその一つが使われ、扉が取り付けられていた。

ツォナム (Mtshognam) は、チュクサンのブラッカ村の対岸にあって、チュクサンより2、30分ナルシン・コーラを遡った右岸にあるが、ツォナムの村といっても3軒の家があるだけである。真中の家をはさんで、上と下の家が寺であった。このへんのことなので寺はパッティも兼ねている



▲ツォーナムの穴居民族の住居跡の岩穴

ようである。スネルグローブは、この村に2つの寺と近くに“Sman rtsi Lha Khan”があると記されているが、現在は物置に使われているようだ。この寺には弥勒を本尊として、無量光、阿閼、不空成就、宝生、大日などの仏像が保存されているそうである。この寺には“Chos grags rgya mtsho” (チョラギャツォー) というニンマ派の僧侶が家族とともに住んでいた。農業とチベット医者 (アムジー) として生計を立てており、生活の貧しさをうったえており、お寺の護持が大変困難だとなげいていた。今より800年前に創建された寺だそう。

先発の土谷がパッティから出て来て、リエゾンは中にいるが、キャンプはここに張るようにと頑張っているとのことだった。

前方1キロ程の真正面には、大きな赤いゴムパの建物と、その左にテ (ネパール名はテタング) の集落が望見できた。そして、チュクサンの方を振り返ると、カリガンダキ右岸の大削壁が、アメリカのグランド・キャニオンのようにその偉容を見せていた。少なくとも500メートルはある垂直の大岩壁である。

その中に何処から現れたのか判らないが制服を着た一人のお巡りがキャンプ場に立っている。聞くとチュクサンに駐在しているポリスだと判った。タシはポリスと何か話をしてたようだが、やがて私のところに来て、

「畜生！ ビーム・バードルの奴が、隊員がテ (テタング) やチュクサン (ツク) の村に行かないよう、ここで見張っておれ、といって、このお巡りをチュクサンから呼びつけやがった」といって、気の短いタシは怒り心頭に燃えていた。

いったい、リエゾン・オフィサーのビーム・バードル・タバが何故ここまで干渉するのか。また、私達がジョムソムを逃げるようにして脱出して来たのは、どんな理由があるのだろうか？ 話をまた、ジョムソムやその前にまで戻して思い出して見よう。

私達の隊がポカラを出発して3日ほど経ったある日、隊長の菊地君が、

「いやー、参りましたよ。ビーム・バードルは私のいうことなら何でもきいてくれるおとなしい奴

だったのですが——」といって次のようなことを私に話しはじめた。

「ビーム・バードルは照さんが数年前に、ムスタンのローまで単身で潜入したことを知っているんですよ。そして、そんな奴をどうしてメンバーに入れたのかと、執拗に私を責めるんですよ」というので、私は、

「いやー、あの問題はカトマンドゥのお役人は皆知っているはずですよ。当時の警察庁のバラール長官だって当然そのことは知っている筈なのに、私を夕食に呼んだりして呉れたのですからね。したがって、そのことは不問に附しており、一応一件落着というところですよ。そうでなかったら観光省のシャルマ君だって許可をする訳はないでしょう」

「ビーム・バードルの奴、ジョムソンのCDOに通報する必要があるとっていましたからね。もっとも、そんなことしたって、私はネパール政府の正式の許可をとっているのだから、高橋さんの問題が、もし出たとしてもゴリ押しに押す心算ではありますが——」といいながら、

「ところが問題がもう一つ起こっているのですー」といって口をつぐんでしまった。私も敢てそれ以上のことは聞かないことにした。

ところがトゥクチェよりジョムソムに向かって隊を進めた日のことである。私達の何人かはTB SのVT Rの取材活動に協力して、ハルカマン・スッパの家の河口慧海の泊まった跡とか、タカリのゴムパの撮影で出発が4時間程遅れてしまった。その日は、私達は誰も知らなかったことではあるが、リエゾンのビーム・バードルは早朝食事を済ますとすぐ、6時半頃ジョムソム目指して単身出発していた。

隊員達は正午前にジョムソムに到着していたが、私は正午過ぎにジョムソムに入った。ところが、私は前日トゥクチェでコックのニマに、ジョムソム・ブーラ（爺さん）のゴビンダ・ナルシン・バッターチャンの裏庭に天幕を張ると良いと言っていた。裏庭は広く、その上炊事場用にヤクや馬を収容する屋根付きの建物があったからだ。そこならば、ジョムソム特有の強風にさらされることもなく、雨が降っても炊事が楽に出来るからであっ

た。

それなのに、露営地は飛行場前のアラカ・ホテル裏の吹きさらしの広場に天幕が張られ、天幕はためき炊事場には砂塵が舞っていた。私はニマに、

「ニマ！なんだってジョムソム・ブーラのところに天幕を張らなかったんだ」というと、ニマは、「カジ・サーブ（リエゾンのこと）からここに露営しろと命令されたので、ここにしました」という。この場所はジョムソムの手前にある役所の建物群のある一番手前のところであった。チェック・ポストやCDOのオフィスまで行くのに10分近くかかるところである。

隊長の菊地君は既にCDOの事務所へ行きっぱなしで、昼食にも戻って来なかった。交渉は夕方まで続いたようだった。

夕食の時菊地君は、

「明日は多分出発出来ないかも知れないが、メンバーは皆、何時でも出発出来るよう準備だけはしておいて下さい。高橋さんの方は今のところCDOは問題として取り上げてはいないのですが、ケサンさんの問題がかなり厳しいことになっているのです」といいながら、

「ビーム・バードルが何もかもよけいなことまで洗いざらいCDOにご注進に及んだので、CDOと警察はものすごく神経質になっているんです」と私達に今までのあらましを説明してくれた。

それは、ケサン・ナムギャル氏がカムバ族出身のラサの貴族階級であること。ムスタン・ラジャの義弟であり、同時にムスタン王国のロイヤル・ファミリーで、しかもチベット人でネパールの市民権をもっていないことだった。その上、今回テレビ会社やチベット研究の学者をロー・マンタンまで案内する目的のため、私達と一緒にここまで来たのではないか、という嫌疑だった。

最近内務省に入っている情報だと、数年前のカムバ事件の時、カムバの頭目ンガイ・ウワンディが、カムバ事件の真っ最中に国籍不明の飛行機から投下された兵器類をムスタンの何処かへ隠匿し未だに発見されてないことである。カムバ事件については、東京新聞出版局から発行された、拙著「ムスタン潜入記」、[ネパール曼陀羅]に詳しく

書いてあるので、ここではふれない。しかし、カムバ事件終結と同時に政府に差出された甚大な兵器は皆、旧い過去の兵器で、飛行機によって投下された新しい兵器については全く提出されず、一体何処に隠匿されているのか現在に至っても謎とされているのである。カムバ事件後政府の警察組織が2カ年間に亘り、くまなく探索したが全く徒労に終り、捜索を打ち切りにしたことはまだ耳新しい。

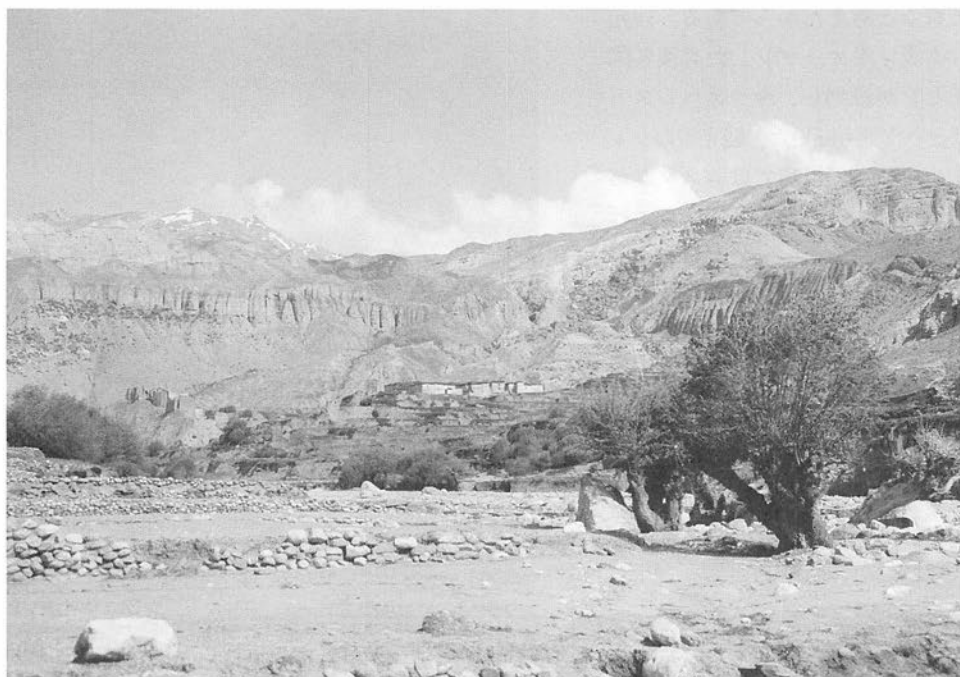
ところが最近、カムバがネパールに入り込みポーターに化けて、隠匿した兵器を鼠が引くように何処かへ持ち出したか一切不明だが、国外に持ち出しているという情報が流れ始めたので、このジョムソムのチェック・ポストは、前にも増してチェックが厳しさを増して来たのである。CDOが言うには、ケサン・ナムギャル氏を通すなら、ポーター全員の面通しをCDOじきじきに明日から始めるというお達しであった。ポーター全員の面通しを行ったら、少なくとも一兩日は遅れることになる。そこで菊地君は、

「こんな事も起こり得ると思い、最悪の場合を考えて、スコッチ・ウィスキー3本、日本製煙草5カートン、ラジオ・カセット1台を用意して来たので、明日もう一度トライして見るつもりです。

もしそれでも駄目な場合、お気の毒ですがケサンさんは、故郷のローに帰ることが出来ませんので、ここから飛行機でカトマンドゥにお帰りになることになるでしょう」

「こんなことが最初から判っていたら、ケサンさんと一日か二日のインターバルを置いてキャラバンをしておれば、こんな問題が起こらなかったのです。これはケサンさんの責任ではなく、全部私の責任ですので、明朝もう一度、駄目ならその翌日という具合に交渉を続けたいと思います。そんな空気ですから高橋さんはなるべく天幕から出ないようにして下さい」といいながら、事件のあらましを皆に説明して呉れた。それにしても、ビーム・バードルが余計なことを告げ口しなかったら、一般のトレッカーと同じように、すんなりとチェック・ポストを通過することが出来た筈である。

翌日、菊地君はサブ・ザックと私の持っていた買物袋に、ラジカセ、ウィスキー、煙草などを詰めて、朝食もそこそこに天幕を出て行った。ケサン・ナムギャル氏も一緒に行ったようである。待つこと数時間、二人は帰って来た。菊地君は、「ラジカセはちょっともったいなかったな。あの程度の返事ではウィスキーと煙草だけでよかった」そう言って、



ツォーナムからテ（テタンゲ）遠望

「本日これから出発出来そうなので、一応出発準備だけはしておいてください。そのうちに何かお達しがあるでしょう」といいながらホテル奥の炊事場に行って、マルファ農場のリンゴから採ってきたブランディを皆に振る舞った。酒を飲まない彼が、自分から率先して酒を飲む気になったのだから、今までのその心労たるや察するに余りあった。

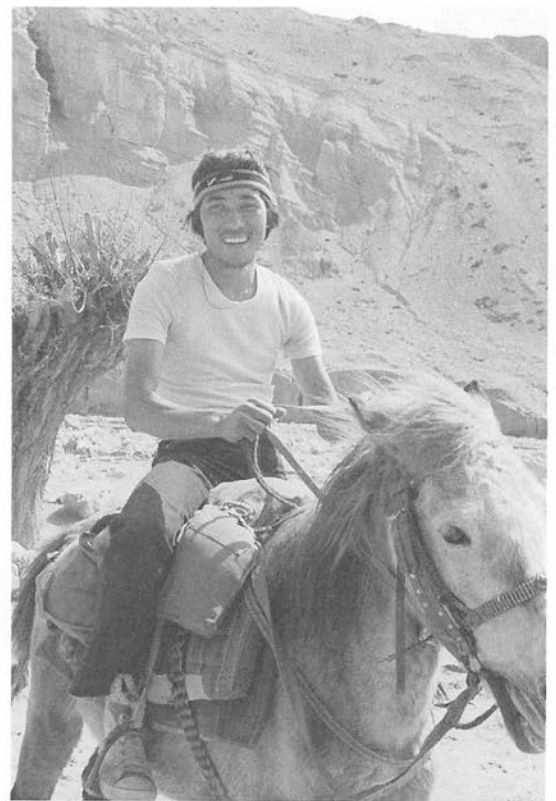
そして彼は、

「CDOはわれわれ遠征隊がどうして、観光省の許可証だけで、内務省の許可証を持っていないのだと、また、別の言いがかりをつけて来たので、私は何処の省であろうと、ネパール政府が許可したものであると、突っぱねたら一応理論上は納得したようでした。しかし、いちゃもんをつけるならどんな理由でもつけられますからね」といって、「この際引き下がったら遠征は中断することになるので、精一杯頑張りましたよ」とつけ加えた。

兎に角、菊地君のご苦労は大変なものである。最初1981年の春にブリクティ登山の許可をもらったが、キャラバン・ルートをムスタン経由に申請したため、内務省の横槍が入ったことがある。そのためブリクティ登山の許可を秋に延ばし、そして3度目の正直に1982年春に延期したのである。ということは、その間に国内情勢も変わってムスタン・ルートがとれると考えたからである。観光省の話では、ブリクティをオープンした直後各国からアプリケーションが殺到し、今やエベレストに次ぐ混雑ぶりだという話も聞いた。観光省のシャルマ君は何処の国の申請もお目当てはムスタンだということを百も承知している男である。そこへオーストラリア隊がマナン・ルートでも良いから1982年ブレに許可してほしいという申し入れをしたという情報が入って来た。私達はもうブリクティの登山許可を延期する訳にはいかない。私達は観光省にマナン・ルートは峡谷が険悪で、とてもポーターを通すことは不可能だと主張しつづけて来たのである。もし、オーストラリアがマナン・ルートより登ったら、私達の主張は砕け面目はまるつぶれである。

そこで、急遽偵察隊をマナンからナウル・コーラとプー・コーラに送り、マナン・ルートがキャ

ラバン・ルートとして不適格だという証明をしなければならなかった。菊地君はカトマンドゥへ2月に入って飛び、そうして約1ヶ月の偵察を終わりにマナン・ルートは極めて難しく、ポーターの身の安全は保証出来ない旨報告書を観光省に提出した。この時、リエゾン・オフィサーとしてビーム・バードルが同行しており、マナン・ルートは不適格だということを立会って認めている。そんなことで、菊地君は今回もビーム・バードルを観光省に推薦したのだろう。観光省としては、条例によって、ブリクティをオープンしたのだから、今更ブリクティ登山を不許可にするわけにはいかない。おそらく観光省としても自省の立場を内務省と折衝したに違いない。その上で観光省がキャラバン・ルートにムスタン経由を認めたことは自明のことである。観光省と内務省との経緯は私にはわからないが、かなりの問題を含みながら、許可の線にこぎつけたのであろう。私は今でもそう信じている。



▲タシ・ザンブー隊員（現NMA会長）

ヒマラヤ登山、日本隊50年の記録(2)

— 山 森 欣 —

〔Ⅱ〕戦後のヒマラヤ登山

Ⅱ-1 はじめに

戦争が終わったのは1945年（昭和20年）8月である。日本が焼け野原で世間がまだ復興に喘いでいた頃、登山者達は意外と早く立ち直った。

慶大は1946年1月関温泉でスキー合宿、早大は4月三ツ峠で合宿。同年夏には各大学とも穂高涸沢で合宿を再開したし、ヨーロッパに残っていた田口二郎（32）と高木正孝（32）は終戦の年の夏にヴェッターホルン北壁を登攀している。（新稿）

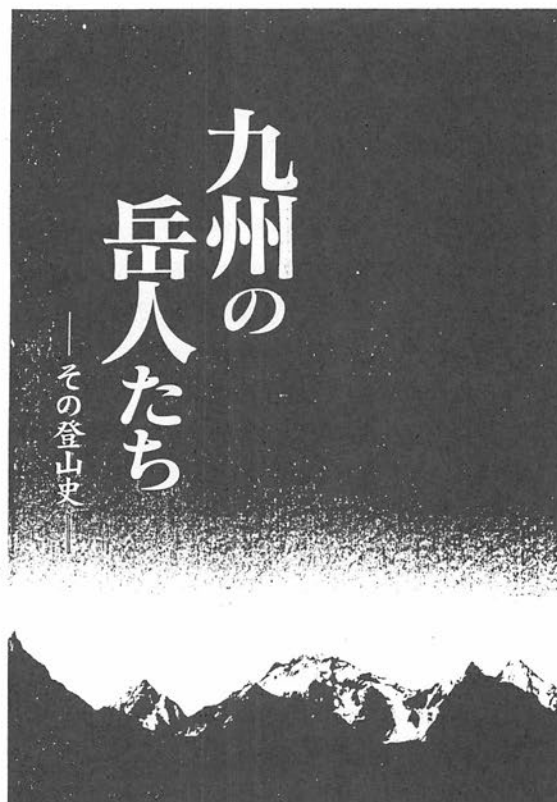
また、戦前の当時は、登攀不可能とさえ考えられていた、穂高岳屏風岩を1944年に登った伊藤洋平（24）は、1947年春、山岳雑誌「岳人」を刊行し、若い登山者を啓発していた。（ヒマラヤへの道）

復興を目指していた日本経済に思わぬ追い風が吹いた。それは日本中が忌み嫌い忘れようとしていた戦争であった。1950年6月に勃発した朝鮮戦争は、いやおうなしに日本を特需ブームに引き摺り込んだ。

このように、朝鮮半島に暗雲が立ち込めていた頃、日本から西に4千キロ離れたネパール・ヒマラヤでは、1950年6月、フランス隊がアンナプルナI峰（8,091m）を登り、人類が初めて八千メートル峰の頂に足跡を残すという記念すべき快挙が成されていた。

そんな状況の中、日本にもようやく「ヒマラヤ登山」の兆しが見えて来た。1952年春、西堀栄三郎が単身ネパールに入り、その先鞭をつけ、同年秋、JACとしてのマナスル偵察隊が勇躍としてネパール・ヒマラヤの地に第一歩を印したのであった。ところが、その前にヒマラヤ登山の許可を得た隊があった。1951年末のことである。

そのことは、2002年5月12日に日本山岳会福岡支部から発行された『九州の岳人たち—その登山



日本山岳会福岡支部編
執筆／井上 優・松尾 良彦

史』の「海外編」、第二章「一、幻のヒマラヤ」に以下のように紹介されている。

[1951年（昭和26年）の師走も押し迫る日、福岡山の会会長・柴藤俊輔（当時）のもとに一通の手紙が舞い込んだ。外務省からだった。「ヒマラヤ登山計画に関する件……印度政府はカンチェンジュンガを中心とするヒマラヤ登山は地位的関係上許可する意向はないが、若し希望するならばナンダ・デヴィまたはガンゴトリ方面の登山には反対しない由である……」待ちに待った登山許可だった。これが戦後日本に届いた海外登山許可第一号である。]

この計画は52年7月外貨の許可もおりながら、結局、8月に印度から許可しないとの通知があり、

日の目を見ること無く終わり、前述のようにJACマナスル偵察隊が戦後の日本初のヒマラヤ登山隊となる訳である。

これに関連した記事が当時のJACの「會報」に載っている。51年11月の158号では、

「福岡山の會のヒマラヤ遠征」との見出しで、

「同會ではかねてシッキムヒマラヤのトウィンズ峰遠征を計畫中であつたが、この程、資金関係、海外連絡等の見通しが略々ついたとして日本山岳會へも正式に後援方を依頼してきた。本會は常務理事會で、同會の柴藤會長、加藤委員の右に對する説明を受け、引き續き役員總會に之が可否をはかったのであるが、慎重検討の結果、同會の計畫の現段階に於いてはいかんながら後援でき難いという結論に達し、この旨柴藤會長宛通知した。しかし、會員が個々の立場で應援協力することとかではないので、更に計畫の吟味なり、隊員の訓練なりに、一層の努力と自重とを切望してやまない。」とあり、福岡山の會が計畫を推進するに当たってJACに後援を依頼したことが窺える。当時、遠征に必要な外貨は自由に手に入る訳はなく、多分その必要性から登山隊がJACの後援を得て外貨取得の道を模索しようとしたのかも知れない。しかし、JACは後援を断ったわけである。

更に52年1月の159号では、

「関西支部榎會長歓迎會」との見出しの記事の中で、

「次に堀田理事からの最近の福岡山の會の外地遠征についての本部で折衝した事項及び日本山岳會の立場等について、色々と具體的な問題について説明があり、榎會長及び望月理事より補足がなされたが特に會長はJACとしては現在のところ遠征を應援する状況に至っておらず、誠に残念であり、これはいやがらせやえこひいきをしているのではないから誤解のないようにと注意があり、會員としては出来るだけ應援をしたいと語られた。」

上記のような話がどうして榎會長から話されたのだろうか。前出の『九州の岳人たち』を読むと臆気ながらその背景が窺える。そこには、[ただひとつ気になったのは、日本山岳會のうごきであった。福岡山の會が同山岳會に後援を依頼したのに対し、同山岳會はこれを断った。(日本山岳會報

「山」2000年12月号・注1)。さらに、同山岳會の有力者が緒方副総理に後援會長を降りよう申し入れた。緒方は「それは山の會に言いなさい」と言ったという。(加藤の話)。そのころ、同山岳會若手グループの間にブロード・ピーク(8,051メートル・注2)遠征計畫が膨らんでいたといわれた。マナスル遠征計畫にも動いていた。同山岳會にしてみれば「地方に先を越される中央のメンツ」にこだわったことは想像に難くない。]

(注1) 2000年12月号のこの記事は山森の署名記事。(注2) ブロード・ピークに関しては、[ブロード・ピークを目標に準備を進めていた早大は、当時占領下にあった国際情勢から無理であるという見通しをつけ、南米のアコンカグア遠征に切りかえた。]と(新稿)にある。

II-2 初登頂時代 [1952年-1964年]

II-2-1) マナスル (8,611m) 初登頂

[山を探す]

京大旅行部を母体とするAACKは、戦前にカブルーやK2遠征を企てながらも遂に実現しなかった。1951年夏、今西錦司(49)、中尾佐助(35)、梅棹忠夫(31)、伊藤洋平(28)らはヒマラヤ登山の第一歩として小暮理太郎がJACの「山岳」に載せた八千メートル峰15座のうち、十座があるネパールに照準を合わせた。その中でも「資料無し」と書き込みのあった「マナスル」をあえて目標に選ぶ。未知を優先した今西の決断であった。しかし、誰もがネパールのことを知らない。

[許可取得涉外]

ところが折よく52年1月にインド、カルカッタで開かれる「インド學術會議」に木原均博士(59)が日本代表として招待されたことが分かった。ここで学者ではなく民間で活躍していた西堀栄三郎(1903,1,28-1989,4,13)に白羽の矢が立った。西堀は無理やりインド會議に潜り込みインドに渡る。ネパール入国は非常に困難な時代だった。西堀は一通の紹介状を持っていた。戦前の立教大学のナンダ・コット隊に報道隊員として参加し初登頂した毎日新聞の竹節作太(46)から、第一回アジア大会に参加したネパールのクリシュナ・バナドール・バーマに宛てたものだった。それも使い国王への

手紙も書き、西堀は運良く2月12日午後、インドのパトナから飛行機でカトマンズに入ったのである。

この時、西堀はネパールの人口は900万余り、自動車と自転車はあるがその他の「車」は無い！と書いている。(山岳第46・47号) 現在人口約2293(2000年7月現在)万人、トラックやバスの排気ガスの美しい雲で汚染された現在となんといい違いであろうか。この交渉が実を結んでマナスルは日本隊に挑戦することになった。

〔派遣母体の変更〕

ところが、西堀が3月14日帰国後この計画は京大からJACに移管されることになった。学術探検に重きを置いていた京大より、登山中心の計画として「全日本的」行事となれば受け皿としてJACしかなかった。それは自然の流れといえよう。

〔偵察隊の派遣〕

こうして、52年秋に今西隊長以下マナスル偵察隊が派遣された。しかし、偵察隊は始めからマナスルに向かうような愚かなことはしなかった。八千メートル峰の巨大さを、何か物差しになる山で試そうとしたのである。選ばれたのは、1950年のモンスーン中にティルマンが3週間登山を展開し、参考資料があるアンナプルナIV(7,525m)であった。ここでは翌年本隊を出すマナスルの登山シーズンも決めなければならなかった。10月5日、ティルマンのBCに到着した一行は、2週間の登山を行い5,800mに到達してこの登山を終えた。従って厳密に言えば、戦後初の日本人によるヒマラヤ登山は、アンナプルナIVで行われたのであった。

偵察隊はマナスルに向かう前に10月23日には、チュルーと呼ばれた6,200m峰に初登頂する。10月29日BCを撤収し、帰国した田口を除いたメンバーがサマのBCに入ったのは11月11日であった。偵察中、エースの高木がクレバスに転落、九死に一生を得る。結局11月26日まで偵察活動を行った。

〔第一次隊・1953年春・三田幸夫隊〕

6月1日午前7時、快晴のC9(7,500m)を出発したアタック隊は、山田、石坂、加藤の順でアンザイレンして9時半第二ステップ、正午第三ステップ少々手前7,750mに到達する。加藤は迷った。頂上までまだ5～6時間かかる。行けば行け

そうな気もするが、帰りは夜中の11時過ぎになる。1950年のフランス隊のアンナプルナIの登頂後の惨事が頭をよぎる。[より確実に、頂上に登ってこそ、本当の山登りだ。] 加藤は登頂を断念した。科学班の中尾、川喜田は、1日午後2時頃プラトウの上からノースコルへ下りようとする3人を望遠鏡で見て彼等は登頂したものと思ったという。

〔第二次隊／1954年春・堀田彌一隊〕

サマの部落民の反対によってマナスル登山は中止。理由は①最近起きた雪崩で僧院が潰されラマが3人死んだ。②昨年は不作で飢饉であったがこれは登山隊が山を荒らしたため神聖なる山神の怒り。このため、ガネッシュ・ヒマールに転進した登山隊は中国との国境稜線を目指した。4月28日稜線上の岩場からチベット側を覗き込んだ加藤達にはキーロン側の絶望的な光景を見てしまった。(2001年秋H A J隊は、そのチベット側からトライした)しかし、トロ・ゴンバ氷河のルートも雪崩の洗礼を受け、再び国境稜線ルートに戻ったが、6,350mに到達して登頂を断念した。

〔第三次隊先遣隊・1955年秋・小原勝郎隊〕

第三次隊を派遣するためにサマ問題のクリアーとアイスフォールの観察などを主目的として派遣された。10月24日サマに到着。ナイケコルに一週間滞在。11月8日C3を撤収した。

〔第三次隊・1956年春・楢有恒隊〕

5月9日今西壽雄とギャルツェンはC6を午前8時に出発。微風だにない絶好の無風快晴。酸素を毎分2L吸って登る。サマの住民はマナスルのことを「カンブンゲン」とあがめている。その頂上は20メートルばかり雪が吹き飛ばされて岩肌が出ていた。一端切れ目に下り逆層の岩場にアイスハーケンを1枚打ち込んで登ると、そこは真の頂上であった。12時半であった。11日にも加藤、日下田が登頂し5年の歳月をかけたマナスル遠征は、幕を閉じたのであった。

成功の成因について松田雄一隊員は、①登頂シリーズに快晴無風に近い好天を掴み得たこと。②チーム・ワークが完ぺきであった。③酸素装備が殆ど完全であった。④ルートを変更して最短コース(スノーエプロンのコース)をとりキャンプを一個短縮し得た、と列記した。(JAC会報187号)

1952年秋 ネパール

アンナプルナIV (7,525m)

隊長：今西 錦司 1902.1. 生 (50) 92.6.15
 隊員：高木 正孝 1913.3. 生 (39) 62.8.6
 田口 二郎 1913.2. 生 (39) 98.9.23
 林 一彦 生 (27)
 中尾 佐助 1916. 生 (36) 93.11.20
 竹節 作太 1906. 生 (46) 88.8.12

LO：ディリー

サード：ギャルツェン

HAP：5名

BC 3,500m 10月5日建設

C1 5,400m 10月9日建設

C2 5,800m 10月13日建設

BC 10月29日撤収

結果：5,800mまで

1952年秋 ネパール

マナスル (8,163m) 偵察

隊長：今西 錦司 1902.1. 生 (50) 92.6.15
 隊員：高木 正孝 1913.3. 生 (39) 62.8.6
 林 一彦
 中尾 佐助 1916. 生 (36) 93.11.20
 竹節 作太 1906. 生 (46) 88.8.12

BC 3,850m 11月11日建設

C1 4,450m 11月21日建設

C2 11月22日建設

BC 11月29日撤収

結果：5,300mまで

1953年春 ネパール

マナスル (8,163m)

隊長：三田 幸夫 1900.3.31生 (53) 91.2.11
 隊員：高木 正孝 1913.3.12生 (40) 62.8.6
 田口 二郎 1913.2.2生 (40) 98.9.23
 辰沼 広吉 1916.1.1生 (36) 95.2.12
 村山 雅美 1918. 生 (34)
 山田 二郎 1922. 生 (31)
 加藤喜一郎 1920.11.29生 (35) 87.12.10
 村木潤次郎 1922. 生 (30)
 山崎 英雄 生 (28)
 石坂昭二郎 生 (22)

竹節 作太 1906. 生 (47) 88.8.12

依田 孝喜 生 (36)

加藤 泰安 1911.1. 生 (42) 83.4.24

科学：中尾 佐助 1916. 生 (37) 93.11.20

川喜田二郎 1920. 生 (33)

LO：

サード：ギャルツェン

HAP：14名

BC 3,850m 4月13日建設

C1 4,600m 4月20日建設

C2 5,000m 4月22日建設

C3 5,400m 4月 日建設

C4 5,600m 4月 日建設・ナイケコル

C5 6,000m 5月5日建設

C6 6,100m 5月9日建設

C7 6,600m 5月11日建設

C8 7,100m 5月15日建設・ノースコル

C9 7,500m 5月31日建設

BC 6月8日撤収

結果：6月1日加藤喜、山田、石坂が北東面7,750mまで到達した。

1954年春・ネパール

ガネッシュ・ヒマールI (7,429m)

隊長：堀田 彌一 1909.1. 生 (45)

隊員：谷口 現吉 1910.9. 生 (43) 92.1.21

村山 雅美 1918. 生 (36)

加藤喜一郎 1920.11. 生 (33) 87.12.10

村木潤次郎 1922. 生 (31)

山崎 英雄 生 ()

山田 二郎 1922. 生 (32)

大塚 博美 1924.10. 生 (29)

松田 雄一 1930.5. 生 (24)

日下田 実 1930.6. 生 (23)

松沢 幸雄 生 ()

辰沼 広吉 1916.1. 生 (38)

竹節 作太 1906. 生 (48) 88.8.12

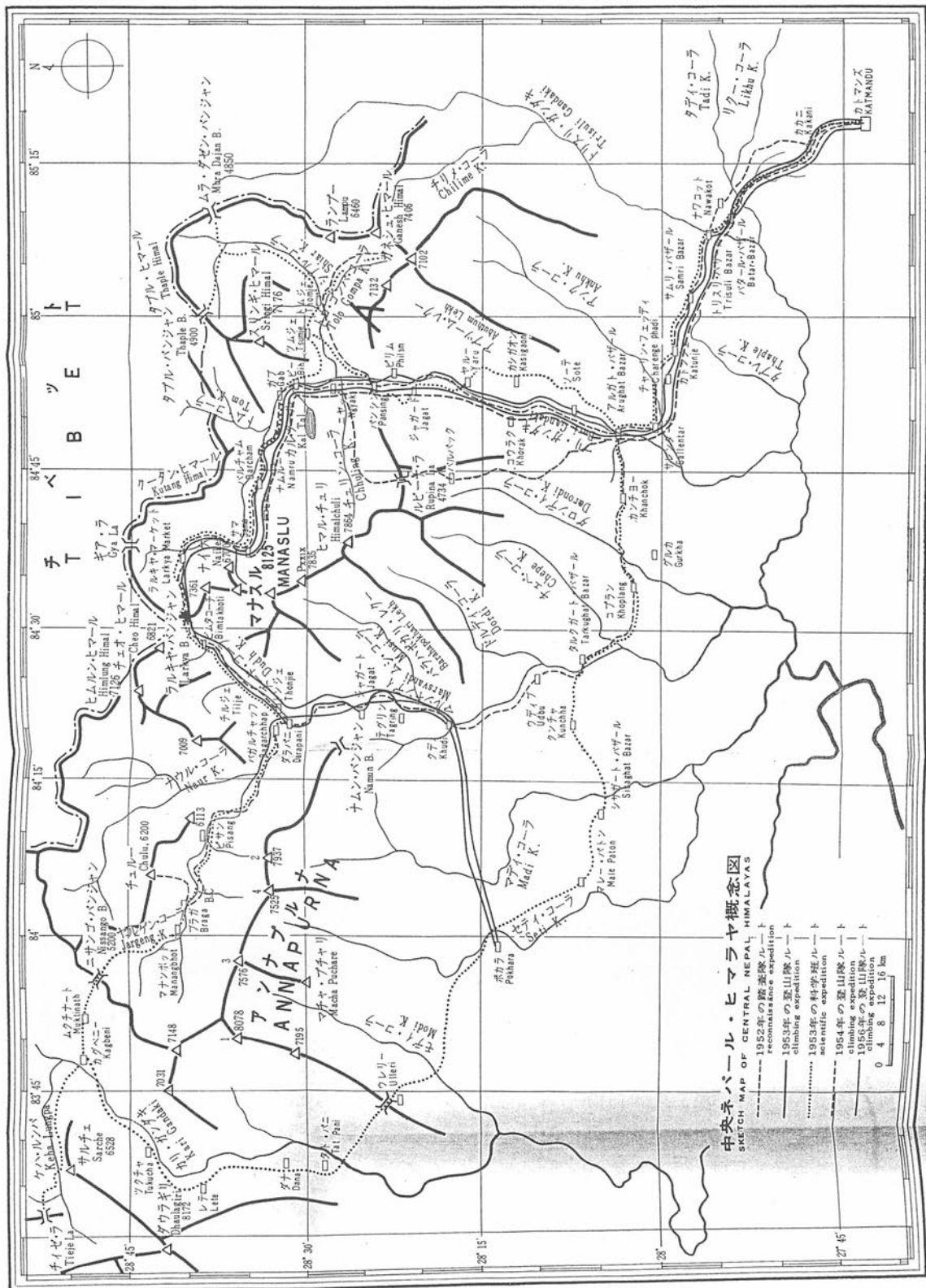
依田 孝喜 生 (37)

LO：ディリー・バハドゥル/サガール・プラサド・ゴータム

サード：ギャルツェン・ミクチュン

HAP：19名

BC 4,500m 4月25日建設



▲1956年当時のマナスル周辺の概念図（マナスル登頂記・横有恒編・毎日新聞社より）

C 1

C 2

C 3 6,050m 5月26日建設

B C 6月19日撤収

結果：5月13日国境稜線6,350mまで加藤、村木、山崎、松田が到達した。

1955年秋・ネパール

マナスル (8,163m) 先遣隊

隊長：小原 勝郎 1912.3. 生 (43) 90.1.23

隊員：村山 雅美 1918. . 生 (37)

橋本 誠二 1918. . 生 (37) 95.6

LO :

サーダー：ギャルツェン・ノルブ

H A P : 4名

B C 3,850m 10月24日建設

結果：ナイケコルに一週間滞在した。

1956年春・ネパール

マナスル (8,163m)

隊長：楨 有恒 1894.2. 生 (62) 89.5.2

隊員：小原 勝郎 1912.3. 生 (44) 90.1.23

今西 壽雄 1914.9. 生 (42)

辰沼 広吉 1916.1. 生 (40) 95.2.12

依田 孝喜 生 (38)

千谷壮之助 1917.1. 生 (39) 96.8.8

加藤喜一郎 1920.11. 生 (35) 87.12.10

村木潤次郎 1922. . 生 (33)

大塚 博美 1924.10. 生 (31)

徳永 篤郎 1927. . 生 (29) 00.9.4

松田 雄一 1930.5. 生 (26)

日下田 実 1930.6. 生 (25)

LO :

サーダー：ギャルツェン・ノルブ

H A P : 16名

B C 3,850m 3月29日建設

C 1 5,250m 4月

C 2 5,600m 4月14日建設 ナイケコル

C 3 6,200m 4月23日建設

C 4 6,550m 4月25日建設

C 5 7,200m 5月4日建設

C 6 7,800m 5月8日建設

B C 5月20日撤収

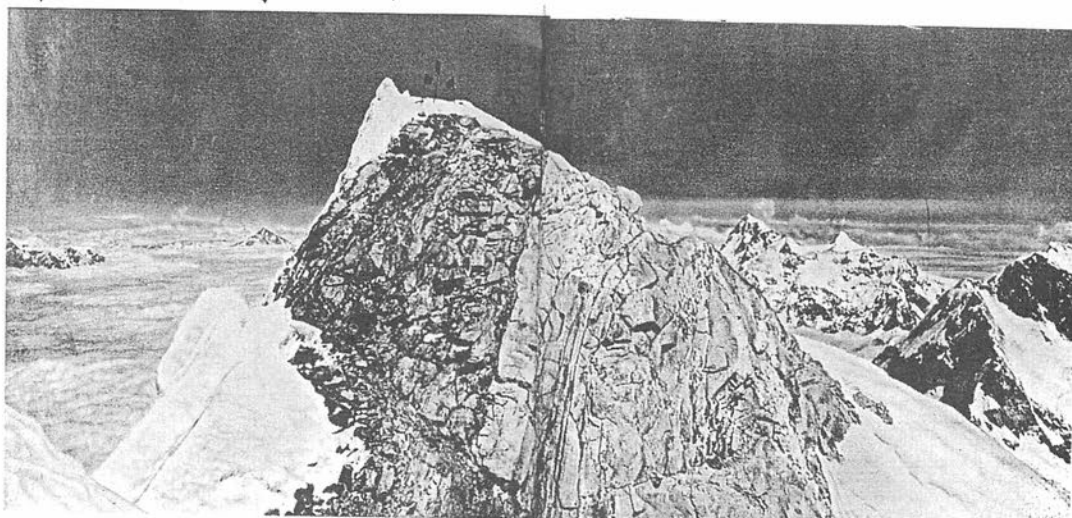
結果：5月9日今西、ギャルツェンが初登頂。11日にも加藤、日下田も登頂した。

クリシュナ・バナドール・バルマ

1925年5月1日カトマンズに生まれた。カトマンズのトリ・チャンドラ・カレッジとインドのベナレス大学で学ぶ。1954年～60年家内工業局長、その後、観光局長、バルバ県知事、内務省次官補、生活協同機関（サージャ）総支配人などを歴任し、ブラバル・ゴルカ・ダクシン・バフ勲章を受けた。1997年5月29日、72歳で急逝。

スリンギ・ヒマール

ガネシュ・ヒマール マナスル頂上



◀ マナスル頂上（山に憑かれた男より）

地域ニュース

《パキスタン》

中・パ合同隊がK 2へ

パキスタン山岳会（ACP）とチベット登山協会（TMA）はパキスタン、中国国交樹立50周年と国際山岳年を記念してK 2（8,611m）へ登山隊を派遣した。リーダーはTMAの桑珠隊長。合同隊のメンバーは下記の通りで6月上旬に登山開始予定。

●パキスタン側

（L）Rahmatullah Qureshi/Capt Muhammad Iqbal, Tbt/Hav Sher Dullah

●チベット側

（L）Sam Drug（桑珠）/Lobsang Yunden（洛桑雲得）/Tsering Dorgi（次仁多吉）/Bianba Zaxi（辺巴扎西）/Reena（仁那）/Lovtse（洛則）/Akebu（阿克布）/Gyabu（加布）/Phubu Thundrup（普布）/Bianbadunzhu（辺巴丹真）/Zaxi Ciren（扎西次仁）/Pubu Tsering（普布次仁）

《中国》

札幌中央労山隊がチョモランマに登頂

今春、北稜からチョモランマに挑戦していた、札幌中央勤労者山岳会隊（佐藤信二隊長(51)ら10名）は、5月18日に長見重能(35)、25日に佐藤隊長と野口光二(54)隊員が登頂に成功した。尚、この他に公募隊に参加した日本人男性タムラシンジも登頂したとの情報もある。

《ネパール》

片山右京が今秋、サガルマータへ

昨秋、チョー・オユー(8,201m)に登頂したレーサーの片山右京(39)が今秋サガルマータ南東稜から登頂を目指して入山することになった。同隊には片山をサポートするため宇佐美栄一(36)、奥田仁一(36)が同行、両隊員はサウス・コルまでのサポートとなる予定。同隊の隊長は宇佐美栄一。

トピックス

国際公募ガイド隊法廷へ

1999年5月13日、英国のマイケル・マッシューズ22歳は世界最高峰の頂に立ち、同国の最年少登頂者となったが、下山時に行方不明となってしまった。マイケルはガイド登山隊のOTTに4万ドル支払って参加、登頂後の嵐の中で行方不明となった。同行のガイドは途中で待っていたが、遂にマイケルは現れなかったという。

このほど父親のディヴィッド・マッシューズ氏は息子の死の責任について法廷で争うことにした。マイケルはガイドに見捨てられたのではないのか？登山隊の酸素の運用に間違いがあったのではないのか？というのが彼の主張だ。

英国ガイド委員会（BMG）はニック・キークスとマーティン・ドイルの二人のガイドについて調査、一度は問題無としたが、マッシューズは登山隊の全隊員（クライアント）の証言を集めてBMGに持ち込み、BMGは再調査することに同意した。ガイド達はマイケルを救えるチャンスがあったのかもしれないという。

マッシューズはたとえ犯罪として立件できなくとも訴訟を起こして、法廷で争いたいとしている。

尚、OTTはこの事故の後に廃業した。

（クライミングNo.212）

HAJ理事会報告

日時：平成14年5月18日（土）10時半～12時

場所：本会事務所

出席者：本人出席：山森欣一、尾形好雄、中川裕、野沢井歩、古関正雄、田辺治（以上本人出席6名）、大内論文、八木原罔明、名塚秀二、岩崎洋、名越實（以上委任状提出者5名）。理事数15名、定足数は10名。よって理事会は成立。

オブザーバー：遠藤登（顧問）、酒井國光（会長）、保坂昭憲（監事）

理事会次第

1）総会提出の議案を承認。13年度入会者を承認。

- 2) 創立35周年記念行事について協議。3つの事業（講演会&祝賀会、トレッキング、出版）の実施について決定。このための資金カンパの実施についても決定した。

H A J 臨時理事会報告

日時：平成14年5月18日14時10分～30分

場所：かんぽヘルスプラザ東京会議室

出席者：〔本人出席〕山森欣一、尾形好雄、中川裕、田辺治、古関正雄、野沢井歩、睦好正治（以上本人出席7名）。八木原罔明、大内論文、名越實、名塚秀二、岩崎洋、（以上委任状提出者5名）。理事数14名。定足数10名。よって臨時理事会は成立。

臨時理事会次第

1) 専務理事、常務理事の互選

3年後の新体制を考慮して別紙案について協議し異論なく決定した。

2) 日常業務処理のため、特に定めるもの以外については、権限を常務理事会へ委任することに決定。（常務理事会構成は、理事長、専務理事、常務理事）

Books

明治大学山岳部80年誌

創部80年を迎えた明大山岳部と炉辺会の歩みをまとめたもの。部と会の歴史を網羅しているが、〔MAC・炉辺会の海外登山〈80年の歩み〉〕と〔外国・海外の山、遠征・探検《MAC・炉辺会海外の山々での足跡》〕の項目によって部・会のヒマラヤ登山をもれなく紹介している。巻末には、平成14年2月に行った「高校山岳部へのアンケート結果」が載っていて貴重な資料となっている。

B5判 314頁（内カラー12頁）2002年6月1日刊 〒101-0062 千代田区神田駿河台1-1
明治大学体育課内 明治大学山岳部・炉辺会

どうする山のトイレ・ゴミ

労山が「登山と自然の共生を求めて、全山岳人に問う」ために、山のオーバーコースと登山者の

課題について様々な角度から資料を提供したもの。内容は①山のトイレと登山者の試み（オーバーユースと山岳自然保護憲章／早池峰山頂トイレで学んだこと／携帯トイレ活用のすすめ／山のトイレ改善の試み／山のし尿処理の技術的可能性／エヴェレスト山中に残されたゴミとし尿／ヨーロッパ・アルプスの山小屋）②登山は山を荒らすか？（クリーンハイク運動の歴史と成果／白神山地における「入山禁止」と登山の自由／集団登山をどう考えるか／ヒマラヤ諸国の山岳自然保護規制）

山を愛する全ての人、必読の書である（山森）

A5判 183頁 2002年6月3日刊

大月書店 1800円＋税

ヒマラヤから

カラコルム便り

拝啓 初夏の候、皆様にはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。さて、出発に際しましては、多大なご支援、ご協力頂きまして有り難うございました。現在当地パキスタンでは戦争というききな臭い状況下に置かれておりますが、安全には充分留意してカラコルム登山を楽しんできたいと思っております。サッカー、ワールドカップでの日本の善戦とこのイベントが世界平和への一因となることを祈ります。

敬 具

日本ヒマラヤ協会 カラコルム連続登山隊一同

■財政支援：1万円（天城敏彦）8千円（藤田弘基）

東京集会のお知らせ

日 時 7月29日（月）午後7時～
内 容 暑気払いです
場 所 H A J ルーム（地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分）
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分）

ネパール登山規則大幅に改定される

ネパール政府は、2002年5月上旬、登山規則の大幅な改訂を行った。詳細は下記のとおりである。

〔Ⅰ〕推薦状の廃止

登山許可申請書を提出する際に、日本山岳協会の推薦状を添付することが義務付けられていたが、今回の改定によりこれが撤廃された。従って今後は、ネパールの指定した「代理店」を通して、登山隊が「直接」観光省に登山許可申請書を提出できる。

〔Ⅱ〕登山シーズンの廃止

これまで、プレ、ポスト、ウィンター、モンスーンと登山シーズンが定められていたが、これを廃止したため通年いつでも登山できるようになった。登山期間は山の高さで場所異なる。

8000m峰	75日以内	カトマンズを出て、登山をして、BCに帰着するまでの日数
7000m峰	60日以内	
7000m峰	45日以内	

〔Ⅲ〕登山料の改定

Ⅲ－1 サガルマータの南東稜（サウス・コル）経由の登山稜が別表のとおりとなった。但し、新聞等では、他のルートについては「従来どおり7万ドル」となっているが、1996年春の改定では一隊7人まで「5万ドル」となっており（この時にサウス・コル経由だけ7万ドルとなった）他のルートがいつ7万ドルに改定されたのか不明である。

Ⅲ－2 登山許可申請後、許可取得前に登山料の一部前払いが必要となった。金額は、

サガルマータ登山料の5% その他の山10%

Ⅲ－3 山は特定していないが以下の値引がある。

①人気がなく登山者が行かない山は半額。または数十パーセントから百パーセント値引もある。

②経済的に発展していない地方（西ネパール？）にある山も値引きする。

③登山技術いらない、短期間で登れる山も値引き。

〔Ⅳ〕費用関係の改定

雇用人の日当等は別表のとおり改定された。ゴミの供託金は「解禁されている全ての山」で必要となり山の高さで500ドル～4000ドルとなる。

〔Ⅴ〕その他

サガルマータ登山料（南東稜）

人数	登 山 料	
1人	25,000ドル	
2人	40,000ドル	
3人	48,000ドル	
4人	56,000ドル	
5人	60,000ドル	
6人	66,000ドル	
7人	70,000ドル	

人権費／保険の保障額（単位はルピー）

	日当	事故保障	病気保障
リエゾン・オフィサー	500	60万	5万
サーダー	400	50万	5万
ハイ・アルチュドポーター	350	50万	5万
BCワーカー	300	50万	5万
ポーター	3,700m下	200	25万
	3,700m上	250	25万

限定付きで新しく開放されたトレッキング・エリア

DISTRICT	AREA
1 TAPLEJUNG	OLANCHUNGOLA, LELEP, PAYUNG, YAMPHUDIN
2 SANKHUWA SABHA	KIMATHANKA, CHEPUWA, HATIA, PAWA KHOLA
3 SOLUKHUBU	NORTH-WEST AREA FROM THEME TO NANGPALA
4 MANANG	NAR PHU AND TILCHE GAON NORTH OF THOCHE VDOS
5 HUMLA	LIMI MUCHU AND WAY TO TIBET VIA TANGE KOHLA OF DAMA VDC
6 DARCHULA	BYAS
7 RASUWA	THUMAN, TIMURE
8 MUGU	DOLPU, PULU, BHANGRI
9 BAJHANG	KANDA

THE LIASION HAS BEEN CANCELLED EXCEPT MUSTANG, HUMLA AND DARCHOLA AREAS.

V-1 サガルマータは16歳未満の登山禁止。

V-2 リエゾン・オフィサー (L/O) が登山隊に同行してベース・キャンプまで行かない場合は、日当の支払いをしなくてよい。但し、その旨、観光省に報告しなければならない。

V-3 登山隊は、キャラバン出発前に雇用するガイド、ポーターの保険手続きを完全に終了しなければならない。

V-4 隊長、L/O、サード、保険会社は、ポーター雇用に関して安全確保のアグリーメントを作成する。

V-5 無許可登山者に対しては罰則を強化し、「10年間入国禁止」とする。

〔VI〕トレッキング・エリアのオープン

新たに別表のとおりトレッキング・エリアが開放された。

サガルマータ16歳未満登山禁止の背景

ネパール政府は、世界最高峰サガルマータに16歳未満が登山することを禁止した。情報によれば2001年5月22日に16歳で北側から登頂したテンバ・ツェリ・シェルパがその前年にネパール側からトライしたが、頂上直下22メートルで悪天候のため断念。激しい風と体力の消耗で下山後に、手の指5本を切断した。

また1999年にもネパールの15歳の少年が同峰に挑戦したものの雪盲になった。

このような背景からNMA (ネパール山岳協会) が政府に対して「記録更新のための競争激化」により遭難が多発する可能性があるとして禁止を提案したものである。しかし、中国側からも禁止しないと効果は少ないようにも思えるのだが。

2003年H A J 登山隊隊員募集

八千メートル峰 シシャパンマに新ルートを探めて

ヒマラヤの八千メートル峰に新ルートを開拓する余地はないか。このテーマ (夢) を追い求めて過去岳人達は様々な努力をしてきた。

1990年代に入り日本隊では、90年チョゴリ北西壁下部 (横浜)、95年マカルー東稜下部 (JAC)、97年K2西壁上部 (JAC東海) など部分的な開拓が行われ、94年山野井泰史が単独でチョー・ユー南西壁に新ルートを開拓した。

現在シシャパンマ峰は、主峰の標高を8,027mとした場合、中央峰の標高が8,008mとなる。このため中国隊が初登頂した北面から中央峰北東稜を登りそのまま中央峰に登頂しているケースがほとんどとなっている。初登頂した中国隊は中央峰北東稜から大雪面をトラバースして主峰に登頂している。日本隊では81年女子隊、88年H A J隊、99年群馬隊は、この大トラバースを行い主峰に登頂した。他隊は何故トラバースして主峰に登頂しないのか。それは「雪崩」の危険を避けるためだろうと推測される。しかし、中央峰を登った岳人たちもそこが「8,000m」の標高を与えられているからなのだが、ヒマラヤの標高は不動ではない。

今後中央峰の標高が8,000mを切ることも考えられる。

シシャパンマ主峰に新ルートは考えられないのか。常々疑問に思っていた。技術的に困難な南西壁では通常ルートにはなり得ない。可能ならば通常ルートとなり得るようなレベルの新ルートをトライしたいと考えている。意欲ある岳人の参加を期待する。

記

1. 時期 2003年9月10日～11月8日 (60日間)
2. 募集人員 10名程度
3. 負担金 100万円
4. 申し込み、問い合わせ H A J事務局

カラコルム連続登山隊情報

バルトロ・カンリからチョゴリザへの連続登頂を目指して出発した登山隊ですがイスラマバードでの観光省との協議でバルトロ・カンリは中止。代わりにガッシャーブルムI (8,068m) からチョゴリザの連続登山に変更して実施します。隊は6月16日スカルドを出発しました。

インド治安情勢(インド・パキスタン間の緊張)

2002.5.23 外務省

1. 概況

(1) パキスタンとの緊張激化

インドにおいては、2001年12月の議会議事堂襲撃事件以来、隣国パキスタンとの間で緊張が続いています。インド政府は同月末に大使召還、大使館員半減、パキスタン航空機の領空通過禁止などの外交的措置を取り、現在も右を継続しているほか、国境付近には両国の軍隊が大量に動員されて対峙している状況にあります。

2002年1月1日からは、インドとパキスタンの間を両国航空機が飛行出来なくなり、インドのアムリトサルからパキスタンのラホールを結んでいた列車とデリー・ラホール間の直通バスの運行も停止されました。外国人がパキスタンのラホール、あるいはインドのアムリトサルから、ワガー国境を陸路で越えることは、現地では、一応可能ということになっていますが、事実上、インドとパキスタン両国を続けて旅行することは不可能に近くなっています。また、ラージャスターン州のパキスタンとの国境に近い地域への列車も軍用優先となっています。

特に、5月14日、ジャンムー近郊の陸軍駐屯地において、多数の女性や子供が犠牲となる大規模なテロ事件が発生し、在印パキスタン大使の本国召還要求、対パキスタン動員体制の強化等が行われております。我が国を含めた各国が武力衝突を回避すべく双方に働きかけていますが、緊張の度合いは高まりつつあると言えます。

(2) 治安情勢の不安定化

一方、インド国内では、異なる宗教や民族集団間の対立に根ざす混乱や暴力行為が発生している地域があります。特に、グジャラート州では、アーメダバードほか各地で、2月末に発生した列車放火事件に端を発する混乱が、州政府の対応が遅れたこともあり、完全

には終息しておらず、散発的に暴動、混乱が発生し、死傷者が発生している地区もあります。このような状況に対して州政府が十分な対応策を講じていないとの強い批判もあります。これらの地域においては、今後とも不安定な治安情勢が継続することが予想されます。

また、労働者デモや反体制の抗議デモ等も各地で散発的に発生していますので、こうしたデモ、集会には近づかないことが賢明です。

2. 地域情勢

(1) インド北部のカシミール地方全域：「退避を勧告します」

カシミール地方の分離独立等を目指す過激派による爆弾テロ事件、これら過激派と軍・治安部隊及び警察との間の武力衝突などが頻発し、相当数の死者が発生しています。過去には、欧米人旅行者の誘拐事件が発生し、現在まで未解決のままとなっています。また、山岳地域のみならず市街地において住民を巻き込んだ無差別テロや銃撃戦も毎日のように発生しており、2001年10月には州議会が襲撃され、2002年3月には州内のヒンドゥー寺院で過激派の手榴弾の爆発により住民を含む8人の死傷者が出ました。

2001年に発生した事件数は4,522件で、合計死者数は3,475人で（うち市民が919人、治安部隊が536人、過激派が2,020人）となっています。2002年に入ってから、連日、治安部隊、越境テロリストや過激派が複数名ずつ死亡する事件が発生しています。

2001年末以来、インドとパキスタンとの間では緊張が高まっており、パキスタンとの間に引かれた管理ライン（Line of Control）及び国境付近においては、両国軍が大規模に動員されて対峙しており、散発的砲撃が連日発生しています。特に、2002年5月14日に婦女子が犠牲となる大規模なテロ事件が発生して以来、インド国内に於いてパキスタンに対

する武力行使の気運が高まり、印パ両国間は一触即発の状況にあります。

つきましては、カシミール地方に滞在されている方々に、退避を勧告しますので、同地域に滞在中の方々は、情勢が安定するまで安全な場所へ退避するとともに、退避に際し、または退避後速やかに退避手段（便名等）及び出国先を在インド日本国大使館に連絡して

下さい。やむを得ない事情により残留される方は、在インド日本大使館と緊密な連絡を維持するとともに、いつでも退避できるよう準備して下さい。

なお、どのような目的であれ、同地域への渡航は、事態が改善されるまでの間、延期して下さい。

パキスタン情勢

2002.5.27 外務省

1. 概況

- (1) 5月14日、インド側カシミールのジャンムー市近郊のインド陸軍駐屯地におけるテロ事件を受け、印「パ」両軍の間で、カシミールの「管理ライン」(Line of Control)をはさんだ銃撃戦や砲撃戦が行われています。5月18日にはインド政府が在印パキスタン大使の本国召還を要請し、印「パ」関係は徐々に緊張の度合を加えています。また、パキスタン政府は、5月25日から28日までに3度にわたる一連のミサイル実験を行ったほか、5月27日のムシャラフ大統領の演説に対するインドの反発等により、印パ間の軍事的緊張は依然として高いまま推移しており、現在、我が国をはじめ英、米国等の各国による戦争回避に向けた外交努力が鋭意行われていますが、依然として緊張緩和の展望は開けておりません。また軍事的にもカシミールの管理ライン (LOC) を挟んで銃撃戦、砲撃戦が連日続いています。

今後、特にカシミールや国境に近いラホール、シアルコート及びグジャランワラの地域等において事態が急速に悪化した場合には、民間商業機の運行が短期間の内に停止されて、空路での国外退避が困難となる可能性も排除できません。今後の印「パ」関係、特に軍事情勢の推移に充分注視して下さい。

- (2) また、パキスタンにおいては、最近、米国等によるアフガニスタンでの軍事作戦に反対する反米、反政府運動は見られませんが、タ

リバン及びアル・カーイダの残党等がパキスタン国内に潜伏していると見られること、パキスタン国内の過激派組織が政府の取り締まり措置に反発していること、イスラム教のスニー派とシーア派の過激組織間の抗争が継続していること等から、テロをはじめとする不測の事態発生の危険が依然として存在しています。

特に3月17日にイスラマバードでキリスト協会爆発事件、5月8日にはカラチにおいてバス爆破事件が発生し、相当数の外国人が犠牲になりましたが、これら事件はいずれも、パキスタン国内に潜伏中のタリバン及びアル・カーイダの残党が、政府による摘発・掃討作戦に対する反発ないし報復として行った可能性は否定できません。今後も同作戦は継続される見込みであり、同じような外国人を対象としたテロ事件が主要都市を含む各地で発生する可能性があります。

2. 地域情勢

- (1) カシミール管理ライン付近の「退避を勧告します」

「管理ライン」を挟んで、インド軍及びパキスタン軍が対峙し、散発的に銃撃戦が発生しており、これら地域は非常に危険な状況にあります。つきましては、上記地域に滞在されている方々には退避を勧告しますので、情勢が安定するまで安全な場所へ退避するとともに、如何なる目的であっても、渡航は延期して下さい。

(2) その他のパキスタン全域：「渡航の延期をおすすめします」（退避に関する情報含む）

同地域の情勢はそれぞれ以下のとおりですが、概況で述べた印パ情勢に鑑み、如何なる目的であっても、同地域への渡航の延期をおすすめします。また、同地域に滞在中の方々とで事情の許す方については、民間商業機が運航されている間に国外退避することを真剣に検討して下さい。特に、カシミールやインドとの国境に近いラホール市、シアルコート市及びグジャランワラー市に滞在されている方については、とりわけ真剣に検討してください。

(イ) アフガニスタン国境から100キロの範囲内の地域（北西辺境州ペシャワール市及びバロチスタン州クエッタ市を除く）

アフガニスタンの首都カブールにおける暫定行政機構の樹立等により、アフガニスタン情勢が改善されるにつれ、アフガニス

タンとの国境周辺地域の情勢は安定化しつつありますが、タリバンやアル・カーイダの残党等が潜入して活動することにより、アフガニスタン国境周辺地域、特に国境に近い地域で情勢が悪化する可能性は排除できません。国境周辺の地域に既に滞在中で事情の許す方は、同地域を一時離れ安全な場所に移動することをおすすめします。

(ロ) イスラマバード首都圏、パンジャブ州ラワルピンディ市及び、ラホール市、シアルコート市、グジャランワラー市

イスラマバード首都圏においては、3月17日、キリスト協会で爆発事件が発生し、相当数の外国人に死傷者（日本人1人が負傷）が出た他、オープン・マーケットでの爆弾事件等も発生しています。また、外国人を対象としたテロ事件がその他の地域で発生する可能性も排除できません。

（平成14年）5月29日（水曜日）

言

宣

衆

議

十四日の襲撃事件発生直後、インドのパドマナバン陸軍参謀長はニューデリーの軍司令部に幹部を招集、対パキスタン軍事行動の是非について協議した。五日間にわたる激論の末に到達した結論は「全面戦争となってもパキスタンから越境してくるイスラム過激派によるテロは止められない」というものだった。インドはカシミール地方のパキスタン側にある過激派拠点への限定攻撃を視野に置いているが、ゲリラの移動は把握しづらいうえ、長引く軍事的緊張で過激派が奇襲に對する心理的準備を整えつつあるからだ。

インド軍・情報機関によると、パキスタン側カシミールには三千を超える過激派拠点があり、計約三千人のゲリラが潜伏、その中にはアル・カーイダやタリバンの残党も含まれている。二十三日にバジパイ首相が視察先のジャム・カシミール州（インド側カシミール）で治安問題を協議した際も「越境テロは現状の軍配備で阻止可能」とする地域の軍司令官の報告を受け、政府の安全保障担当閣僚委員会も現時点での開戦は「早計」との見方でまともった。

こうした戦術的見地からの慎重論に加え、インドが

印、現状では慎重姿勢

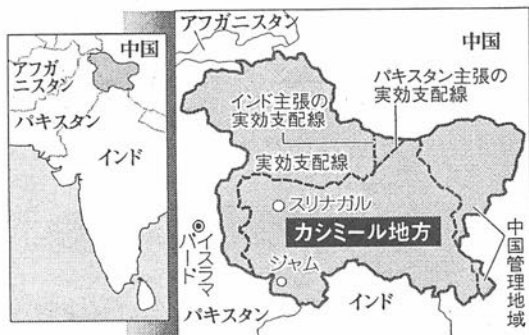
懐疑論

【ニューデリー28日＝佐藤浅伸】インドのジャム・カシミール州などで起きたイスラム過激派によるテロ事件をきっかけに、インドとパキスタンの軍事的緊張が極度に高まっている。対パキスタン攻撃をちらつかせるインドに対し、パキスタンも受けて立つ構えだ。第四次印パ戦争のぼつ発はありうるのだろうか。

過激派

先に攻撃すれば、パキスタンから「侵略者」とのレッテルを張られ、インドの国際的イメージが損なわれるとの懸念も強い。ただ、バ

インドの有力メディア・ツデーが政府内外の軍見方として伝え



ニンチン・カンサ(7,206 m)登山計画

ごあいさつ

日本ヒマラヤ協会（英文略称：H A J）は、広くヒマラヤ地域の登山・踏査・自然科学・人文科学について研究・実践するヒマラヤ愛好者約800名で構成する全国組織の任意団体であります。

本会は、1967年の創立以来インド、アフガニスタン、ネパール、タジキスタン、カザフスタン、キルギス、パキスタン、ブータン、中華人民共和国など広大なユーラシア大陸の山野を舞台として活動し、中国につきましては、1983年に初めて踏査隊を派遣して以来、60隊の登山・踏査隊を派遣し、七千メートル峰4座、六千メートル峰5座の初登頂に成功しております。

ヒマラヤ登山熱が高まる中で、本会会員の中から身近に仲間や良きアドバイザーがいないため、ヒマラヤ登山の夢を実現出来ない人達から、「休暇のとりやすい時期」にヒマラヤ登山を実践したい、との希望が寄せられるようになりました。

本会ではこの要望に応えるため、1989年からインド・ヒマラヤを舞台に「サマー・キャンプ」を実施し、93年からはその舞台に中国の山々を加え、2000年にはパキスタンでも実施しました。本年は、チベット自治区中央部、ラサから至近距離にあります名峰「ニンチン・カンサ7,206m」にて同峰としては4回目のサマー・キャンプを実施致します。

本会の「サマー・キャンプ」は、総て結集した隊員による「登山」であります。現地においても、隊員がルート工作や荷上を行い、登頂を目指すことが原則であります。したがってこのごろ増えた「ガイド付き公募登山隊（いわゆる高所遠足）」とは全く異なります。

また、大自然は人知を遥かに超えた力、パワーを秘めております。これまでの経験を十分に活用

しながら、細心の注意を払い且つ迅速な行動により、所期の目的を達成する所存であります。さらに、本年は「日中国交正常化30周年」に当たります。この登山を通して日中登山親善交流を果たし、いささかなりとも30周年に貢献できれば幸甚であります。

なにとぞ、この趣旨をご理解いただきまして皆様の絶大なるご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2002年3月

日本ヒマラヤ協会 ニンチン・カンサ登山隊
隊長：山 森 欣 一

計画の概要

1. 隊の名称

日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ登山隊
2002年
(H A J Ningqin Kangsha Expedition
2002)

2. 派遣団体

日本ヒマラヤ協会

3. 目標の山

中華人民共和国西藏自治区浪卡子県／江孜県
ニンチン・カンサ峰（寧青崗桑・Ningqin
Kangsha 7,206m）

4. 目 的

- * ニンチン・カンサ峰の登頂（西稜ルート
を予定）
- * 山岳自然環境の保全（テイクイン、テイクアウトの実践）
- * 日本と中国の友好親善交流

5. 登山期間

2002年7月20日～8月25日（37日間）

6. 隊の構成

山森欣一隊長以下4名

7. 推進の組織

日本ヒマラヤ協会ニンチン・カンサ峰登山
隊実行委員会

会 長：山森 欣一
(H A J 理事長)

委 員 長：野沢井歩
(同 専務理事)

副実行委員長：八木原圀明
(同 常務理事)

実 行 委 員：尾形 好雄
(H A J 常務理事)

” : 岩崎 洋 (同)

” : 中川 裕 (同)

” : 睦好 正治 (同)

” : 登山隊員

8. 隊の事務局 (留守本部を兼ねる)

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4丁目2
番7号 萬栄ビル501号

日本ヒマラヤ協会

☎ (03)3988-8474 FAX 03-3988-8502

夜間：隊出発まで 山森欣一

” : 隊出発後 中川 裕

日 程

7月20日 成田→北京 (飛行機、山森・大神田)

関西空港→北京 (飛行機、樋上、柳)

21日 北京→成都 (飛行機)

22日 成都→ラサ (飛行機)

23日～24日 ラサにて出発準備

25日 ラサ→ヤムドクツォ (車)

26日～28日 高所順応訓練

29日 ヤムドクツォ～BC

30日 } 登山期間 (20日間)

8月18日 }

19日 ベース・キャンプ清掃日

20日 BC→ラサ (車)

21日～22日 ラサ滞在

23日 ラサ→成都 (飛行機)

24日 成都→北京 (飛行機)

25日 北京→成田 (飛行機、山森・大神田)

北京→関西空港 (飛行機、樋上、柳)

隊の構成 (年齢は出発時)

隊 長：山森 欣一 (1944. 2. 生) 58歳

1) 〒134 東京都江戸川区

2) 日本ヒマラヤ協会 ☎03-3988-8474

3) 山嶺登高会

4) 1975 インド、ヌン (7,135m) 副隊長

1978 パキスタン、ハチンダール・キッシュ
(7,163m) 副隊長

1980 ネパール、カンチェンジュンガ (8,586
m) 偵察隊長

1981 ネパール、カンチェンジュンガ隊長

1982 インド、クン (7,077m) 隊長

1984 中国、ナムナニ (7,694m) 偵察隊長

1985 中国、ギャラ・ペリ (7,294m) 偵察隊長

1986 中国、ゲニ (6,204m) 偵察隊長

1987 中国、ラプチェ・カン (7,367m) 隊長

1989 中国、シャラリ (6,032m) 隊長

1991 中国、シュエバオ・ディン (5,588m)
秘書長

1991 中国、ミニヤ・コンカ (7,556m) 隊長

1992 中国、ムスターグ・アタ (7,546m) 隊長

1992 中国、クラウン (7,295m) 隊長

1993 中国、ユイチュ (6,179m) 隊長

1994 中国、ミニヤ・コンカ (7,556m) 隊長

1996 中国、ヤンラ・カンリ (7,429m) 偵察
隊長

1997 中国、クーラ・カンリ II (7,418m) 隊長

1998 中国、カバン (6,717m) 偵察隊長

1999 中国、カバン (6,717m) 隊長

1999 中国、ナムナニ (7,694m) 隊長

2000 中国、ターラ・リ (6,777m) 隊長

2000 中国、クーラ・カンリ I (7,538m) 隊長

2001 中国、ヤンラ・カンリ (7,429m) 隊長

副隊長：樋上 嘉秀 (1944. 6. 生) 58歳

1) 〒537 大阪市東成区

2) 交楽荘薬店

3) 飄逸沢遊会

4) 1993 中国、ムスターグ・アタ (7,546m) 登頂

1994 中国、ユイチュ (6,179m) 登頂

1995 インド、ヌン (7,135m) 副隊長

- 1996 中国、チュルー(6,168m)
- 1997 中国、クーラ・カンリⅡ(7,418m)副隊長
- 1998 中国、カバン(6,717m)偵察
- 1999 中国、カバン(6,717m)
- 1999 中国、ナムナニ(7,694m)〔グナ・ラ(6,902m)登頂〕
- 2000 中国、ターラ・リ(6,777m)副隊長
- 2001 中国、ヤンラ・カンリ(7,429m)副隊長

隊員：柳 謙一(1941.8. 生) 60歳

- 1) 〒838 福岡県朝倉郡

3) 福岡県庁山岳会



▲左端が主峰と西稜

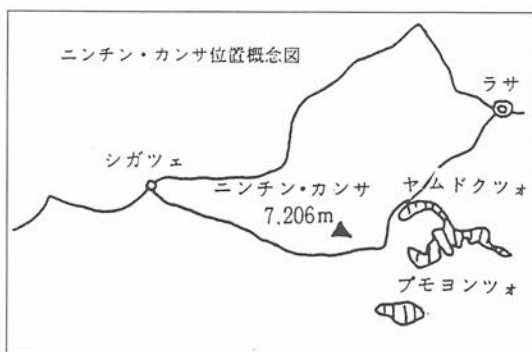


▲ニンチン・カンサ(7,206m) 西稜 2001年H A J隊撮影

- 4) なし

隊員：大神田伊曾美(1944.5. 生) 58歳

- 1) 〒190 東京都立川市
- 3) 八王子いわや山岳会
- 4) 1996 タジキスタン、コルジェネフスカヤ(7,105m)登頂
- 1998 キルギス、レーニン(7,134m)登頂
- 1999 中国、チョー・オユー(8,201m)登頂
- 2000 パキスタン、スパンティーク(7,027m)登頂
- 2001 中国、ムスターグ・アタ(7,546m)登頂



平成13年度入会者一覧

(平成13年4月1日～14年3月31日)

番号	氏名	生年月日	住所	電話番号	所属
2768	角田 富美子	50,12, (50)	平塚市	0463-34-2216	藤沢山の会
2769	深井 嘉浩	66, 3, (35)	名古屋市	052-777-6322	
2770	野高 健司	70,12, (30)	北安曇郡	0261-26-2306	雪標山岳会
2771	金子 敬	44, 5, (56)	東山梨郡	0553-35-2847	
2772	上小牧 慶寛	59, 6, (42)	今海市	0288-22-4233	宇都宮溪嶺
2773	田中 正志	59, 7, (42)	中野市	0269-22-3975	まみとくい
2774	寺田 七郎	45, 3, (57)	太宰府市	092-922-1091	
2775	及川 英男	43,11, (58)	江別市	011-386-9434	札幌山びこ
2776	伊藤 秀明	58, 1, (44)	宇都宮市	028-607-2308	宇都宮溪嶺
2777	土器屋 由紀子	39, 1, (62)	横浜市	045-431-4047	山岳気象学
2778	高橋 宙	71, 9, (29)	八千代市	047-485-1959	
2779	田辺 義博	55,10, (45)	神戸市	078-997-1438	県庁山岳部
2780	蜷川 達也	55, 2, (46)	横浜市	045-391-2082	神奈川山の会
2781	東 昭一	49,10, (51)	藤沢市	0466-22-6051	ブロッケン
2782	山本 悟	53, 9, (47)	倉吉市	0858-28-5153	岳獅会
2783	日野岡 宣男	47, 6, (53)	比企郡	0492-96-3434	直登会
2784	北村 誠一	67, 2, (34)	宇都宮市	028-622-1450	宇都宮溪嶺
2785	増子 麗子	54, 8, (46)	北見市	0157-61-9960	クーラカンリ
2786	鈴木 昭	37,12, (63)	横浜市	045-383-3849	日本山岳会
2787	関根 孝	59, 1, (42)	足柄下群	0460-2-2611	スポニチ
2788	塚田 宏司	34, 1, (67)	栃木市	0282-22-1823	栃木山岳会
2789	乾 昌弘	39,10, (60)	稲敷郡	0298-76-0195	神戸山岳会
2790	吉武 裕志	75,11, (25)	大和市郡	046-367-6923	やまくら
2791	梅山 義弘	38, 4, (63)	下都賀郡	0282-43-6113	富士産業
2792	飯 正	48, 5, (53)	宇都宮市	028-656-6330	松下ハイキング
2793	百瀬 尚幸	46, 8, (54)	東筑摩郡	0263-92-6608	長野県山協
2794	伊東 研二	73, 5, (28)	岡崎市	0564-24-3563	トヨタ自動車
2795	中嶋 清松	49, 7, (52)	大里郡	048-581-7839	
2796	児玉 隆司	56, 8, (45)	湯沢市	0183-72-5712	山歩の会

#平成13年度入会者29名（内女性3名）[前年度28名] #20代＝3名、30代＝3名、40代＝9名、50代＝9名、60代＝5名、70代＝0名、平均年齢47.6歳（男性：47.0、女性52.7）

HAJ 35周年記念行事資金協力をお願い

記

35周年に記念の行事を行うこととなりました。
会員の皆様にも資金のご協力を仰ぎたくここにお願い申し上げます。

1. お願いする金額：一口 1万円

*機関誌「ヒマラヤ」誌上にて氏名・口数を公表します（匿名を希望される方は、その旨ご連絡下さい。）

事務局日誌 (6月)

還暦祝賀会、於わだち（遠藤、山森、尾形）

- 1日（土）カラコルム連続登頂登山隊家族会、於ルーム、同社行会 かんぽヘルスプラザ東京（80名）
明治大学山岳部創部80周年記念祝賀会、於明大（山森）
- 3日（月）CMAヘニンチン・カンサ隊費用送金
- 7日（金）外務省人物交流課からカラコルム連続登山隊の中止要請電話入る。
同隊岩崎洋隊長出発
ヒマラヤ368号発送
- 10日（月）同隊本隊出発
- 13日（木）H A J 創立35周年記念行事案内を関係者へ送付
- 18日（火）CMAからチョモランマ、チョー・オユー、シシャバンマの料金改訂FAX入る。
- 24日（月）東京集会（11名）
- 26日（水）I C I 石井スポーツ、横田正利社長

〔訂正とお詫び〕ヒマラヤ368号に掲載した「高齢者登頂リストから「山下健夫」が脱落していました。Na67として1949, 1, 4 チョモランマ8,848m 2000, 5, 19 51 136を追加致します。関係者の皆さんにご迷惑をお掛けしました。お詫びします。（山森）

ヒマラヤ No.369 (8月号)

平成14年7月10日印刷 14年8月1日発行

発行人 山森欣一

編集人 山森欣一

発行所 日本ヒマラヤ協会

〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号

電話 03-3988-8474

郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
TEL: (03) 3740-2674(直)
<http://www.tokyo-np.co.jp/>

最新 クライミング技術

ジムゲレンデのフリークライミングからルンヂ、アルパイン、ビッグウォールまで、すべてのロッククライマー必読の書。この技術書を単なるマニュアルとしてではなく、その意味、選択基準までを含めて詳しく解説、実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。

菊地敏之 著

1600円

山小屋の主人の 炉端語

著者な山小屋の主人たちが宿泊の登山者たちに炉端で語る一人話の取って置きの物語。

工藤隆雄 著

1500円

すぐ役立つ 山の花学

「飛騨高山の花博」として知られる著者の、山の花見術入門書。

小野木 三郎 著

1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法

山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。

飯田睦治郎 著
桜井博幸 著

1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はここに。

石井光造 著

1300円

北アルプス やまびと物語

「岳人」に3年余り連載した「山人探訪」連作の続に、加筆、登山をより楽しむための冊子。

柳原修一 著

1456円

北アルプス 山小屋物語

歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。

柳原修一 著

1456円

花と歴史の50山

「花と歴史の山」の第2弾、花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。

田中澄江 著

1359円

改訂増補 六十歳からの 日本三百名山

60歳から13年間で三百座を踏破したスーパ―お爺さんの山行記。

田中三郎 著

1456円

新・山靴の音

還暦をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著

1262円

中高年登山 なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむよう、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著

1500円

登山の 運動生理学百科

「どうしたら合理的で安全な登山ができるのか」を、ヒマヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著

2000円

山書散策

今まで数多く発刊された山書、何を読んだらよいか、そんな時の指針として――「山人」連載時から好評。

河村正之 著

1500円

※本体価格に消費税が加算されます。

THE GAMOW BAG

高山病対策の必需品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社*

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

遥かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

◆格安航空券のご相談は◆
キャラバンデスク
(東京) ☎03(3237)8384 (直通)
(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1



株式会社 西遊旅行

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■大阪営業所/〒530-0026

大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料) をご利用下さい。

☎0120-811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田登山店／〒101-0061 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004